

20世紀の思想から考える、 これからの都市・建築

アンリ・ルフェーヴル
コーリン・ロウ
ケネス・フランプトン
アルド・ロッシ
クリストファー・アレグザンダー
レム・コールハース

塚本由晴
渡辺真理
長谷川豪
難波和彦
石田壽一

南後由和
市川紘司
山道拓人
進 勇太郎
岩元真明

小嶋一浩
北山 恒
藤原徹平
寺田真理子



論理・思想だけが空間の構想を支えてくれる

小嶋一浩

都市・建築は、社会の中でどのような役割を担い、意味を持ち、位置づけられているのか。都市・建築が生み出す「空間」は、必要性だけでそこにあるのではなく、それが生じると同時に、望むと否とにかかわらず、制度として発動し、世界・社会に作用し始める。だから、「空間」の生成にコミットする建築家は、そのことに自覚的であらねばならない。言い方を変えれば、自覚的であることで、「空間」の可能性をその都度の状況の中で最大化することもできるであろう。ゆえに、建築家として自身の建築の方向性・思想性を構築していくためには、建築が置かれている歴史的・社会的・都市的背景を学びながら、空間を論理的に思考することが大切である。では、論理的に思考するというトレーニングは、いかにして可能か？

本を読みまくる、というのは、いつの時代にも有効な方法だろう。そして、できれば読み取ったことをベースに今日的な問題をそじょう組上に載せて議論したい。議論することで、思考の精度と距離を測定したい。

読むべき本Ⅱ古典は、たいしてヴァージョン・アップされていない。アルド・ロッシ『都市の建築』は、私が大学院の修士の頃『OPPOSITIONS』誌に英訳が掲載されて、そのコピーで読書会をやっていた。先行するバイブル、コーリン・ロウ『コラーージュ・シティ』も、和訳はまだなく、研究室にあった原著(立派なハードカバー本)を英語で読んだ。そうした

個人的な事柄の一方で、大学院の恩師、原広司は、とりわけ言語を大切にすると人だったので、学生時代に一緒にやったコンペなどを通して、提案を端的に言語化することや、余計なものをそぎ落として案を強くしていくことを体験し続けた。

本書もまた、そうした流れの中で生み出されたプロダクトである。出版というかたちをとることにしても、もちろん重要な意味がある。ダイアログのための仕込みをし、実際に議論を行なったその記録を、もう一度文字にして推敲し、吟味する。当たり前のことだが、その成果であるこの書籍には、凝縮された果実のような滋養があるはずである。

そのような態度は、横浜国立大学大学院／建築都市スクールYIGSA小嶋スタジオのこれまでの「再読」課題にも通じている。再読対象となる空間を訪れて体験し、五〇分の一の巨大模型で再現し、読みこなすことから始めて、それをこれからの時代の建築として翻訳して捉え、新たな空間を設計すること。

本書は、YIGSA主催で行なわれた「横浜建築都市学」での対談・レクチャーをベースに構成されている。「横浜建築都市学」は、毎年異なるテーマを設定して実施している。それが可能なのは、四人の建築家（プロフェッサー・アーキテクト）とは別にプロのキュレーターをも専任教員としてメンバーに持つからである。建築家だけで毎年こんな企画を持統できるわけがない。言い方を変えれば、YIGSAのフォーメーションには、設計と論理の両方が組み込まれているのである。「建築をつくることは、未来をつくることである」というYIGSAのマニフェストを実行するには、感覚だけではなく、かように論理が問われるのである。

歴史を遡った批評の先に建築や都市の「未来」がある——寺田真理子

建築の概念、建築家の職能を新たに捉え直す動き

日本ではここ数年、コモنزの概念、つまり他者と「共有する」ことに新しい価値を据えた建築への取り組みが増えてきている。今では地域の資源を共有／シェアすることで、街に新たな価値を生み出す建築のあり方、空間の使い方を提示する建築家も少なくない。YIGSAでも「Creative Neighborhoods」という次世代の居住環境をテーマにしたシンポジウムで継続的に「コモنز」をテーマに議論を進めており、さらにスイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETHZ）と「Spaces of Commoning」（人々が時間、活動、知識、モノといった資源を共有し、関係性を育んでいく場）の共同研究を行なっている。

今ここで、私たちは都市における建築家の役割や意義、そして都市・建築の概念を歴史的文脈の中であらためて位置づけ、定義し直す必要がある。YIGSAでは、この大きな課題に対して多層的な議論をすべく、二〇一五年度の「横浜建築都市学」という授業において、本書のベースである「二〇世紀の思想から考える、これからの都市・建築」のオムニバス・レクチャーを企画した。二〇世紀を代表する六人の思想家、建築家に焦点を当て、欧米から生まれた都市・建築の理論を若手論客とともに今日的に読み解き、日本における「これから新しい建築・都市」はどこに向かうべきなのかを議論したいと考えた。

二〇世紀の問題意識と現代の問題意識の共通点

この思想家、建築家たちの論点は、YIGSAでこれまで議論してきた近代の建築・都市のあり方、つまり「モダニズム」を問い直す問題意識と重なっている。今、あらためて建築の概念が問われる中、アジアや日本における地域固有の歴史的、文化的なコンテクストから都市をブリコラージュし更新することは可能か。また、いかに都市・文化としての新しい価値を創造し、人々が都市に対する共同性を持ちうるかといった重要な課題に対して、コーリン・ロウの『カラー・ジュ・シテイ』とケネス・フランプトンの『批判的地域主義』から議論したいと考えた。さらにアルド・ロッシの『都市の建築』から、ヨーロッパ型ではなく、日本の都市の文脈に根ざす建築タイポロジーの可能性を議論し、考えたかった。また現代社会において、人々がなんらかの資源を共有することによって育む関係性について、アンリ・ルフェーヴルの『日常生活批判』や『空間の生産』から、さらに環境を認識するダイアグラムの共有で、誰もが参加可能な建築のデザインについて問うべく、クリストファー・アレグザンダーの『パターン・ランゲージ』や『形の合成に関するノート』都市はツリーではない』から考えたいと思った。このオムニバス・レクチャーのトリは、グローバル資本主義経済が生み出した都市の変容を直視したハーヴァード大学での都市研究、そして二〇一四年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展で総合ディレクターとして「建築の近代化」の検証を行ない、近現代の重要な課題を批評的に取り上げてきたレム・コールハースにしたいと考えた。

六名の思想家、建築家たちの「思想」をめぐる議論のポイントは、そこから「これからの建築・都市」を考えることに主眼を置いていること。また今回のレクチャーの主役は、その思想を解題するゲストの講演者五名であって、思想家たちではない。そして各回のテーマは、思想家、建築家たちの思想の現代性を問うべく設定された大切な主題だ。

社会と建築の新しい枠組みを实践・研究する若手論客たち

今回、この議論を組み立てるにあたり特に重要だと考えたのは、モデレーターに五人の若手論客たちを配することだった。彼らに期待したのは、これからの時代を担う建築家、理論家として、彼らの世代が二〇世紀の都市・建築の理論や思想をどのように捉え、これからの社会や生活に接続させることができるかという問いを踏まえた議論の進行である。同時に彼らには、学生たちとゲスト講演者との間をブリッジし、学生たちの理解を深めてほしかった。五人のモデレーターを選んだ理由には、彼らの活動・研究における建築と都市へのアプローチがある。建築史という立場から二〇世紀の建築理論を研究し、また中国建築に関して批判的地域主義の視点から批評する市川紘司。またアレグザンダーのパタン・ランゲージのシステムを応用し、社会資源としての木造賃貸アパートの有効な改修方法を「レシピ」として言語化し実践する連勇太郎。「建築のタイポロジー」を見据えつつ、都市における建築のあり方をコンテクストから分析し、人々の空間の使い方について研究し実践する山道拓人。またアンリ・ルフェーヴルの思想から出発して、現在は社会学の立場から都市と建築を研究する南後

由和。また、長くレム・コールハースの研究を続け、二〇一五年末にロベルト・ガルジャーニによる『レム・コールハース—OMA——驚異の構築』(二〇〇八/邦訳II鹿島出版会)を難波和彦氏とともに翻訳上梓した岩元真明。このように歴史的な視座と現代社会に対する批評性をもって研究や実践に取り組み五人がモデレートする、世代を超えた深い議論を期待した。

これからの建築・都市を考えるための議論のプラットフォームへ

YIGSAでは、この一〇年間、建築家である山本理顕、北山恒、飯田善彦、小嶋一浩、西沢立衛、藤原徹平、そして乾久美子に加わり、「今、建築家は社会に何を問うべきか。建築の主題は何か」をテーマに批評的に議論をしてきた。その議論は、「横浜建築都市学」でのさまざまな分野の専門家との対話やYIGSAでのスタジオ講習会で展開されてきた。講習会は、ただ学生への包括的な教育の場ということだけではなく、これからの建築像を考えるための、建築家による開かれた批評の場でもある。そして、近代社会、モダニズム建築の概念から解放されて新しい価値観を提示する、創造の場でもある。

今回のレクチャーの企画を通じて、かつて私が編集者として関わった建築雑誌『SD』の「海外建築情報」での若い建築家による熱い議論を思い出す。あのような若手建築家による議論、そして世代を超えた議論の場をまた実現したい。歴史を遡った批評の先に建築や都市の「未来」があるという確信のもとに、YIGSAが今後も「思想」を持った建築批評のプラットフォームであり続けることは、社会において重要な役割と意味を持つだろう。

はじめに 小嶋一浩+寺田真理子 3

目次

アンリ・ルフェーヴル 12

Henri Lefebvre

ふるまいの生産

「イントロダクション」 南後由和
日常生活批判／都市と政治／空間の生産／建築との交差／議論の三つの軸

「レクチャー」 塚本由晴
ルフェーヴルとの出会い／リズム分析を東京にあてはめて考える／ビデオロジーIIふるまいの学問／コナリティ、スキル、リズム／ブルーノ・ラトゥール「アクター・ネットワーク・セオリー」

「ダイアログ」 塚本由晴×藤原徹平
二項対立を無効化する遊戯性／「コミュニティ」ではなく「コナリティ」／コナリティーズと暴力性、政治性

コーリン・ロウ 54

Colin Rowe

処方箋としてのコラージュ・シティ

「イントロダクション」 市川敏司
多彩なる経歴／断片性——建築家にインスピレーションを与えつつける理論／『マネリスムと近代建築』／器用人ツクリヤによる都市のデザイン——『コラージュ・シティ』／その現在性——歴史、あるいはあり合わせのものへと向かう想像力

「レクチャー」 渡辺真理
二つの「透明性」／理想的ヴィラの数学／コラージュ・シティ／ユートピア的考え方／SF派とタウンスケープ派／オブジェクトとしてのモダニズム建築／ブリコラージュ

「ダイアログ」 渡辺真理×北山恒
各国の理解／文化とは身体的体験である／グローバルゼーションの中で建築と関わる

ケネス・フランプトン 92

Kenneth Frampton

批判的地域主義と建築のローカリティ

「イントロダクション」 市川絳司

「解体」世代の論客／ポスト・アヴァンギャルド——批判的地域主義とは何か／視覚の拒否とテクニク／グローバリズムへの抵抗

「レクチャー」 渡辺真理

インターナショナル・スタイル対リージョンリズム／インターナショナル・スタイルへの反動／建築家なしの建築／ヴァナキュラー——ラボポートによる分類

「ダイアログ」 渡辺真理×藤原徹平

批判的地域主義とテクニクの問題／態度としての批判的地域主義、形態としての批判的地域主義／グローバリズムにおけるローカリティ／辺境としてのマレー軸／欧米から見た日本、アジアから見た日本

アルド・ロッシ 128

Aldo Rossi

『都市の建築』と新しいタイポロジー

「イントロダクション」 山道拓人

ロッシが生きた時代背景／都市であり建築である「都市的創作物」／時代を超えた定数としての「類型」／「素朴機能主義批判」／「類型」から「類推」へ／作品を通して理解する／ロッシから学ぶ

「レクチャー」 長谷川豪

実用的な過去／使う対象としてのタイポロジー／「ポスト史観」から「連続的で積層的な歴史観」へ／へはなす／建築からへかたむく建築へ／proto-type-ology

「ダイアログ」 長谷川豪×北山恒

タイポロジーを書き換える／いかに文明を相対化するか／今の時代に求められる建築家の役割

クリストファー・アレグザンダー 166

Christopher Alexander

パターン・ランゲージから学ぶこと

「イントロダクション」 連勇太郎

「ノート」——設計プロセスの外部化／都市はツリーではない——近代都市計画批判、そして自己批判／パターン・ランゲージの誕生／最近の活動について／プランナー、デザイナー、アーキテクト

「レクチャー」 難波和彦

「ノート」の自己批判としての「ツリー」／「構造」は人間の内にあるのか、外界にあるか／デザインにおける認識図式と環境の関係／パターン・ランゲージと現実との齟齬

「ダイアログ」 難波和彦×北山恒

パターン・ランゲージは崇高さに到達できるか／パターン・ランゲージの教育的価値／レム・コールハースのダイアグラム／アーキテクトの生成力

おわりに 北山恒 240

レム・コールハース 200

Rem Koolhaas

ダッチモダンから考える

「イントロダクション」 岩元真明

修養時代（一九六八―七八）——コールハースに影響を与えた人々／助走時代（一九七九―八八）——ポストモダニズムとの対決／制作時代（一九八九―九八）——コンペ意欲作と『S.M.L.X.L.』／実現時代（一九九九―二〇〇八）——アイデアの実現と過熱する都市研究／近年のコールハース（二〇〇九）——近代建築史研究／動的な境界、ダッチモダン、田園

「レクチャー」 石田壽一

動的な境界／機能主義批判／オランダ的プラグマティズム／ファン・エーステレンによる都市計画の価値／オランダと境界

「ダイアログ」 石田壽一×小嶋一浩

境界を乗り越え協働する／合理性に対するリテラシー／大都市と田園は二項対立ではない／フロンティアを開拓する試作品

日常生活批判

南後由和 アンリ・ルフェーヴルはマルクス主義の哲学者で、一九〇一年にフランス南西の農村部に生まれて一九九一年に亡くなりました。ライフワークとして、ルフェーヴルに一貫していた問題意識は、「日常生活批判」というものです。今日の主な議題になる、六〇年代から七〇年代にかけての都市論や空間論も、日常生活批判から発展していきました。ルフェーヴルの都市論や空間論の時代背景を示す象徴的な出来事に、一九六八年のパリの五月革命があります。同時代の日本では、東京大学の安田講堂の占拠事件や御茶ノ水の日本大学・明治大学界限での学生運動が起きていました。事前に北山恒さんにヒアリングをさせていただいたところ、北山さんがルフェーヴルを知ったのは、横浜国立大学の学生運動の集会だったそうです。集会のビラで、ルフェーヴルに思想的な影響を受けて同時代のヨーロッパで活動していたシチュアシオニスト[*1]のことが紹介されており、そのシチュアシオニスト経由でルフェーヴルを知ったというお話が印象的でした。

私のほうからのイントロとして、まず日常生活批判、そのあと六〇年代から

七〇年代にかけての都市論と空間論、なかでもそれらの集大成である『空間の生産』(一九七四/邦訳 齋藤日出治訳、青木書店、二〇〇〇)「図1」について主にお話します。そして最後にルフェーヴルの思想と建築とのクロスポイントについても言及できればと思います。

まず、日常生活批判に関して、図2を見てください。左に「経済」や「国家」、右に「日常生活」と書かれています。日常生活というのは所与のものとしてあるのではなくて、国家の官僚制、価値を数量に置き換える経済のシステムなどによって支配・搾取されていく。ルフェーヴルは、幼少期を過ごした農村部が都市化によって変貌を被り始めたことを目の当たりにしていました。農村部の共同体には、日常生活の営みの反復を通して培われる「ふるまい」や「作法」が見られるわけですが、それらも変容せざるをえなかったわけです。例えば農村における祭りは、季節の移り変わりに合わせて行なわれ、人々の抑圧されたエネルギーの解放の場にもなっています。そういった農村での日常生活のリズムや多様性が、近代の資本主義によって、時計時間のような数字や交換価値に還元されていってしまうことに批判意識を持っていたのです。



図1:『空間の生産』

「レクチャー」

ルフェーヴルとの出会い

塚本由晴 今日はず、これまでアトリエ・ワンでやってきたことと、アンリ・ルフェーヴルの思想がどのように交差しているかについて話します。二〇〇一年に都市を観察した書籍『メイド・イン・トーキョー』（貝島桃代＋黒田潤三十塚本由晴、鹿島出版会）と『ペット・アーキテクチャー・ガイドブック』（東京工業大学建築学科塚本研究室＆アトリエ・ワン、ワールドフォトプレス）を出版しました。西洋の建築理論を借りるのではなく、東京から建築理論を起すかどうかを考えたかった。この二冊はいろいろな受け止め方をされましたが、意外だったのは美術の分野からのラブコールで、展覧会に呼ばれることも多くなりました。「展覧会でペット建築をつくってくれないか」と言われるわけですが、誰かが使うわけでも、住むわけでもない展示物として建築をつくることには違和感がありました。この二冊が対象としていたのは、普通の人々がつくる実践的な建築です。無名の人々やその場所の条件がたまたまつくり上げたものの面白さに関心がありました。

二〇〇三年に、アメリカ・ミネアポリスで展覧会「How Latitudes Become Forms」に参加したときに、トルコの建築家からルフェーヴルの『空間の生産』を薦められて、東京に戻って読みました。自分たちが考えていることをうまく言い表わしているなと驚きました。その中に、作品か製品かという区別を議論するところがあるので、**「都市」**が作品のほうに挙げられていることに興味を持ちました。都市空間とは、いろんなところからやってきた、いろんな立場の人々が、寄ってたかって取り組んでいるうちにいつのまにかでき上がったもの、背景の異なる多様な配慮のあいだの均衡が維持されているものです。それを作品と呼ぶのは非常に面白いなと思いました。オーサーシップがあることが作品だと思っていましたが、オーサーシップを外しても時間をかけて醸成されたものであれば作品と見なせるというのは、目から鱗が落ちる思いでした。

リズム分析を東京にあてはめて考える

ルフェーヴルの『空間の生産』には「リズム」の概念[*]が出てきます。最初はよくわからなかったのですが、《ガエハウス》(二〇〇三)を建てたときに、これこ

コーリン・ロウ

Colin Rowe

処方箋としてのコラーージュ・シティ

- 一九二〇 イギリス・ロザラムに生まれる
- 一九三九―四五 リヴァプール大学にて建築を学ぶ
- 一九四八 ロンドン大学ヴァールブルグ研究所に所属
- 一九五一―五二 アメリカへ移住し、イエール大学で学ぶ
- 一九五四―五六 テキサス大学オースティン校講師を務める
- 一九五八―五二 ケンブリッジ大学で博士号取得、同大学で講師を務める
- 一九六二―九〇 再びアメリカへ渡りコーネル大学で教鞭をとる
- 一九七六 *The Mathematics of the Ideal Villa and Other Essays*
(『ミニエリスムと近代建築』伊東豊雄＋松永安光訳、彰国社、一九八一)
- 一九七八 *Collage City* (フレッド・コッターとの共著)
(『コラーージュ・シティ』渡辺真理訳、SD選書、二〇〇九)
- 一九九九 アメリカ・ワシントンD.C.にて死去

多彩なる経歴

市川紘司 コーリン・ロウは、二〇世紀後半の建築・都市論をリードした建築史家、建築批評家、建築教育者。主著として『マネリスムと近代建築』（一九七六／邦訳Ⅱ彰国社、一九八一）「図」と『コラーージュ・シテイ』（一九七八／邦訳ⅡSD選書、一九九二）「図」が知られています。

生まれはイギリスで、一九二〇年、四五年にリヴァプール大学を卒業し、四八年にはロンドン大学ヴァールブルグ研究所に所属して「イニゴー・ジョーンズの理論的ドローイング」という修士論文で修士号を取得しました。そしてこの時期からイギリスの建築雑誌『Architectural Review』に理論的な論文を発表しています。後に『マネリスムと近代建築』に収録された「理想的ヴィラの数学」（一九四七）や「マネリスムと近代建築」（一九五〇）などです。

修士を終えたロウはリヴァプール大学での教職後、アメリカに渡ります。まずイェール大学で学ぶ（一九五一―五二）と、テキサス大学（一九五四―五六）とコーネル大学（一九五六―五八）で教職を歴任。短期間でイギリス、そしてアメリカを東、西、

東とせわしなく移動したことになりますが、この間、ジェームス・スターリングやピーター・アイゼンマンといった二〇世紀後半を代表する建築家を指導しています。

その後、今度はイギリスに戻ってケンブリッジ大学で教えた時期を挟み、コーネル大学の教授に落ち着きます。これが一九六二年。ようやく活動拠点を定めたロウは、上記二冊の主著の刊行や、アイゼンマンやリチャード・マイヤーらニューヨーク近辺で活動する建築家グループ「ニューヨーク・ファイブ」の理論的支援者としての役割も担いました。その後、一九九〇年に教職を引退。一九九九年にワシントンD.C.で没します。

断片性——建築家に
インスピレーションを与えつづける理論

さて、以上のプロフィールから、ロウについてわかることがいくつかあります。

まず、『第一機械時代の理論とデザイン』（一九六〇／邦



図1:『マネリスムと近代建築』



図2:『コラーージュ・シテイ』

全面的な否定ではありません。仮にユートピアを否定してブリコラージュを全面肯定するだけであれば、それはただ別のユートピアを構想するにすぎないからです。ル・コルビュジエとパツラーディオ、ユートピアと歴史的都市、現在と過去、形式とその文脈。このような異なる／相反する性質の事物を等価に見つめ、どちらかに肩入れすることなく両者をとりあえず許容し、そこから丁寧に使えそうな断片だけをより分け、組み立てる。それがロウの基本的な態度だと思います。そう、ロウの態度そのものが「あり合わせのもの」から創造的な仕事をするブリコラールであるわけです——もちろんその研究や分析の方法は高度に専門的なものですが。あらゆる価値観を受け入れるべき多元主義の世界、都市に建築的ストックが満載する成熟した現在の都市社会において、ロウのこうした態度の有効性と批評性はむしろ増しているはずです。

「レクチャー」

二つの「透明性」

渡辺真理 今日のコーリン・ロウによる二冊の本、『マニエリスムと近代建築』と『コラージュ・シテイ』についてお話しします。

ロウは、一九二〇年、イギリス生まれの建築史家で、一九九九年に亡くなりました。都市計画家であり、同時に批評家でもありました。彼はイギリスで教育を受け、アメリカに渡りテキサス大学オースティン校で教鞭をとった後、イギリスに戻りケンブリッジ大学で教えます。このようにアメリカとイギリスをまたいで仕事をするのですが、最終的にはアメリカのコネル大学に落ち着き、そこで建築教育を推し進めることとなります。

『マニエリスムと近代建築』は一九七六年に、『コラージュ・シテイ』は一九七八年に、それぞれ原著が刊行されています。ある平面図を見てなぜこのアイデアが閃くのか。異なる建築物の平面図の比較の妙、建築についてのロウの冴えは一言で言うとうそいうことで、「形態分析」と呼ばれる彼独自の方法論を確立して